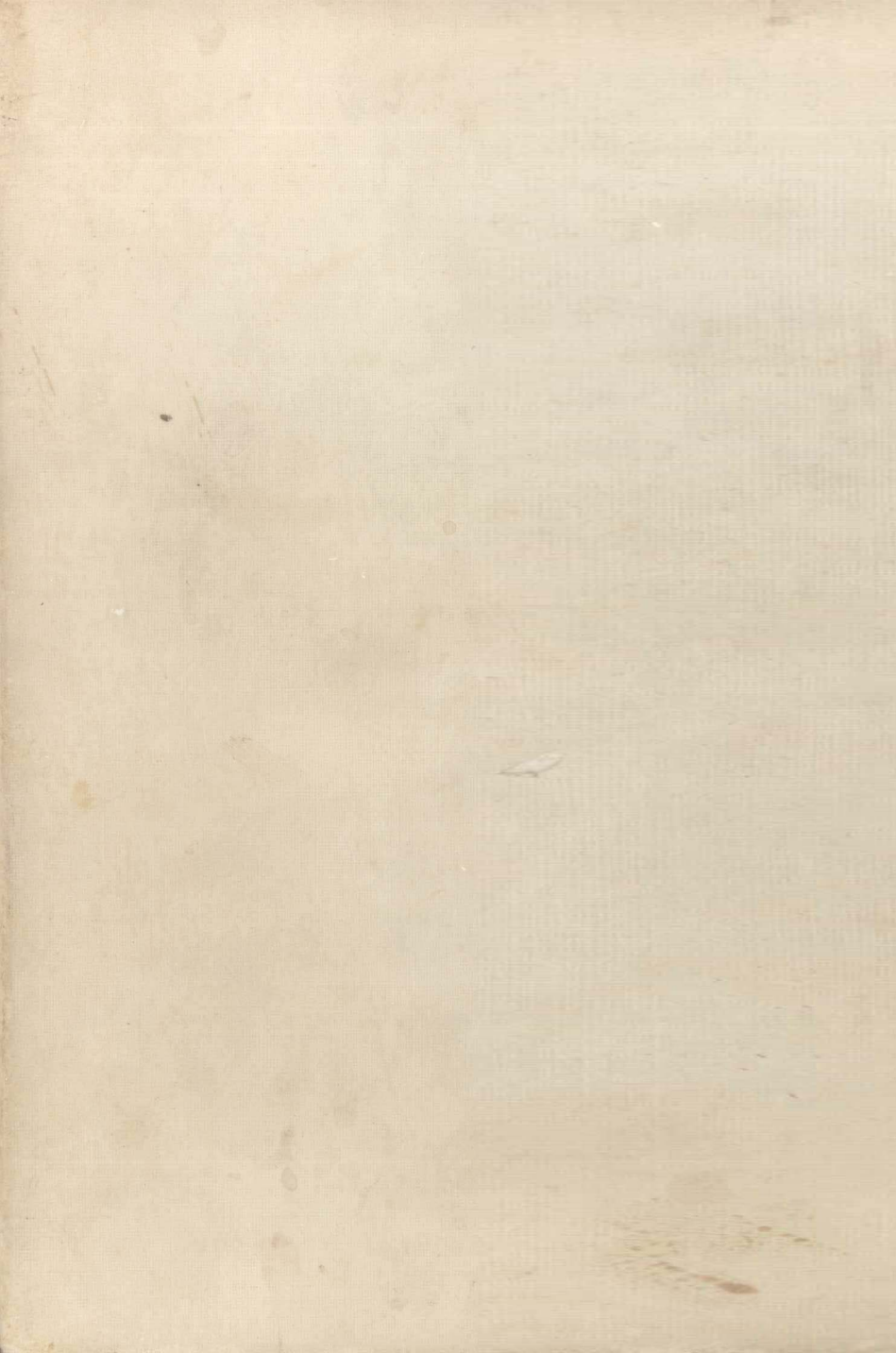




殺しの四人

仕掛人・藤枝梅安

池波正太郎

講談社

殺しの四人 仕掛人・藤枝梅安

昭和四十八年三月十日 第一刷

昭和四十八年四月二十五日 第二刷

著者 池波正太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号 一一二

電話〇三一九四五―一―一一大代表 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 四九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©池波正太郎 一九七三年

目次

おんなごろし	三
殺しの四人	四
秋風二人旅	七
後は知らない	一七
梅安晦日蕎麦	一五
あとがき	二四

装
幀

玉
井
ヒ
ロ
テ
ル

おんなごろし

一

そのとき、下駄屋の金蔵は、女房おだいがとめるのもきかずに、寢床の上で煙草を吸っていた。

病みあがりの金蔵だが、いくらか元氣になると、これまで絶ち切っていた大好物の煙草の味をおもい出してたまらなくなり、おだいが用たしに出かけた留守をねらい、ひよろひよると戸外へ出て、同じ品川台町の通りにある煙草屋で煙草を買い、おだいが隠しておいた煙管きせるを見つけ出し、

(飛びつくように……)

吸いはじめたのであった。

五つになるむすめを背負って帰って来た女房が、これを見て、びっくりし、

「お前、梅安先生ばいあんに、こんなところを見られたらどうするつもりだえ」

煙管を取りあげようとするのへ、

「うるせえ。ちつとばかりやったところで、どうこうなるわけのものでもねえや」

金蔵はおだいを突き飛ばし、たてつづけに煙草を吸った。

青ぐろく浮腫んだ顔や躰へにじむ汗が薬臭かった。

そこへ……。

裏口から、ふらりと鍼医者はりの藤枝梅安ふじえだばいあんが入って来たのである。

二間きりの家の中へあがつて来た梅安は、いきなり、ものもいわずに金藏のあたまをなぐりつけた。

「あっ……」

金藏は、あたまを抱えてうずくまってしまう。

梅安が煙管を二つに折って、わがたもとへ入れ、煙草入れもふところへしまいこんだ。六尺に近い大きな躰の藤枝梅安の、こうした動作は実にゆったりとしたものであって、団栗どんぐりのような小さい両眼は大きく張り出した額ひたいの下にくぼんでい、聞いているのか閉じているのかさえよくわからぬ。

坊主頭にはいるが、梅安は盲目ではない。近年は盲人たちもみ療治のほかに鍼はりをうって治療をするほどになっているけれども、藤枝梅安について、このあたりの人びとは、

「なんでも、上方かみかたで、みっちりみっちりと修行をしなすったらしい」

「あの大きな躰で、あのふとい手指で、あんな細い鍼をよくあやつれるものだと感心するね」

「見たところは、妙にのろのろのろしていて、あぶなっかしいが……」

「それにしても、よく効くというじゃあねえか」

「そりゃもう、ときめんだよ。おれなざあ、三月も痛みがとまらなかった腰みづきの、ここんところを

五日で癒^{なお}してもらった」

「へへえ、そんなものかね」

「そのかわり、気が向かねえと、いくらたのんでも来ちゃくれねえ。なにしろお前、治療のときも口ひとつきかねえ変人先生だ」

それほどに無口な梅安が、下駄屋の金蔵にめずらしくこういった。

「病^きいで死損^しなつたのを忘れたのか。夜もねむらず、看病をしつづけた女房のころを忘れたのか。きさま、煙草なぞのんだら、三日であの世へ行くことになるのだぞ」

ゆっくりといいきかせているのだが、突^つ伏^ぶしている金蔵は、ふるえあがっていた。

治療をすまして藤枝梅安が帰って行ったあと、金蔵がおだいに、

「あの声をきいたか。凄^すえ声だった……」

「そうかねえ。なんだか、ぼそぼそといっていたようにだけ……」

「いいや凄^すえ。おらあ、梅安先生に殺されるか、と、そうおもった……」

「なんだねえ、ばかな。私は、ありがたくきいていたよ。お前さんも、もういけませんよ、煙草なんぞやつては……」

「わかった。わ、わかつているともよ」

どうしたわけか金蔵は、ぐったりと床に横たわり、急に、おとなしくなつて女房のことを素直にきいている。

おだいは、先の梅安の言葉や声を、凄^すいとも恐ろしいとも感じてはいない。

いずれにせよ、亭主がおとなしく病後を養い、一日も早く店へ出て仕事をしてくれなくては困るのであった。

下駄屋金藏の家は、品川台町の坂の途中にある。当時このあたりは、南から西へかけていちめんひろがる田畑と雑木林を見下す高台で、江戸の郊外といつてよく、大名・武家の下屋敷と寺と、丘と木立の中にはさまれた百姓小屋であった。

品川台町の通りを南へ下った左手に、「雉子の宮」の社がある。
ものの本に、

「このあたりは北品川領、大崎という。慶長のころ、將軍家御放鷹のとき、この社へ雉子一羽飛び入りたり。そのとき神名を問わせられしに、このあたりの百姓たち、山神の祠なるよし申しあげければ、以後は雉子の宮と唱え申すべきむね、上意ありてより、かく号くるといふ」
などと、しるしてある。

別当は宝塔寺といひ、丘の上の社殿を仰ぐ鳥居の右手に、その本堂が在った。

鍼医者・藤枝梅安の家は、この雉子の宮の鳥居前の小川をへだてた南側にある。わら屋根の、ちよつと風雅な構えの小さな家で、こんもりとした木立にかこまれていた。

外見は四十をこえて見える梅安だが、この寛政十一年で三十五歳になる。

梅安は助手も女中も置かぬ「ひとり暮し」で、家の掃除や洗濯には、近所の百姓の老婆が通つて来てくれる。

梅安が家へもどると、見事に肥った沙魚が十余尾、笹に入つて台所へ置かれてあつた。

こうしたことは、めずらしいことではない。

どちらかといえば懶惰で、無愛想さわりなく、金品にも執着がない藤枝梅安なのだが、鍼医としての腕は相当なものらしく、病氣全快をした人びとがこうしていろいろ届け物をして来るのだ。

して見ると梅安は、どこか患者に好まれる性格をもっているのやも知れぬ。

もっとも、梅安は初めに診察をして、自分の手に負えぬことがわかると、
「私ではだめだ。もっと、うまい医者に診ておもらい」

はっきりといい、さっさと帰ってしまう。

そうしたときの梅安は、

「取りつく島もない……」

ほどに、すげないそうな。

台所の沙魚を見るや、梅安は、びちゃりと舌を鳴らした。食欲をそそられたらしい。

新年を迎えたばかりの、このごろの沙魚は真子・白子を腹中に抱いて脂がのりきつている。

梅安は、のろのろと鍋を強火にかけ、生醬油に少々の酒を加え、これで沙魚をさっと煮つけて
おいて、

「ふむ、ふむ……」

ひくひくと鼻をうごめかしながら、居間へはこび、冷酒を茶わんにくみ、炬燵へ入ってすぐさま食べはじめた。

朝から、どんよりと曇っていた空から白いものが落ちてきはじめた。まだ七ツ(午後四時)にならなかったが、梅安は行灯あんどんにあかりを入れ、またしても箸はしを把とって、残りの沙魚を平らげてしまった。頭も骨も残さぬ。

「ごめんなさいましよ。もし、梅安先生。おいでなさいますかえ？」

戸口で、しわがれた声がした。

梅安は、茶わんの酒をのみほしてから、

「親方ですね。ま、おあがんなさい」

炬燵こたつでぬくもったまま、こたえた。

三間の小さな家である。

訪問者がすぐに、梅安の居間へ入って来た。

梅安と同様、これもでつぷりと肥って、風体ふうていも上品な、どこぞの大店の主人あるじにも見えようという、いかにもおだやかな人相にんそうの老人なのである。

親方、と梅安がよんだ老人は、さし向いに炬燵へ入って来て、

「ふってきたねえ」

「この寒いのに、よく、ここまで……」

「なあに、駕籠かごを雉子の宮の近くの茶店へ待たしてありますよ」

「ところで、何か？」

「わしが、ここへ来るときの用事は、きまっていますよ、梅安さん」

「ふむ……」

「人ひとり、また殺^キっておもらい申したいのでね」

「ふむ……」

老人は、赤坂・田町の桐畑近くに密集する娼家の束ね^{たな}をしている顔役で〔赤大黒の市兵衛^{あかだいこくいちべえ}〕という。

江戸の暗黒街でも、

（それと知られた……）

経歴と勢力をもつ市兵衛であった。

市兵衛は、六十をこえているくせに、まだつるつるとあぶらの乗った手で、小判三十五両を包んだ袱紗^{ふくさ}を炬燵の上へ置き、梅安の顔をのぞきこむようにした。

梅安は不精^{ぶじよう}たらしく炬燵から手をぬき、袱紗の中身をあらためてから、わずかにうなずいて見せた。

「承知しておくんなさるかえ？」

「先ず、殺しの相手をうかがおう」

「女ですよ」

「ふうん……」

「葉研堀^{やげんぼり}にある大きな料理屋で万七^{まんしち}という……その女房のおみ^{おみ}の^のというのを殺してもらいたいのだがね」

梅安は黙って、あくまでも無表情に市兵衛をながめた。

「万七」の女房というなら、それは後妻のほうである。

なぜなら三年前に、藤枝梅安は、万七の女房・おしずを殺していたからだ。

もっとも、このことを赤大黒の市兵衛が知っているはずはない。

三年前のそのとき、万七の女房殺しを金五十両で梅安に依頼してきたのは、本所・両国一帯の盛り場を縄張りなわばりにしている香具師かぐしの元締もとじめ・羽沢はねざわの嘉兵衛かへいだったのである。

だが梅安はこのとき、市兵衛に「いまの万七の内儀うちぎさんは後妻のちざえですね」などと、念を押したりはしなかった。

梅安のように、殺しを商売にしている男は、依頼主と金高によって、依頼を受けたり、ことわったりする。

殺す相手のことや事情などには、いっさい口を入れぬのが、この世界の定法じょうほうであった。

その点、赤大黒の市兵衛も羽沢の嘉兵衛も、信用しんようにおける依頼主だといってよい。

しばらく考えたのち、梅安は三十五両の半金が入った袱紗包みを取って、しずかにふところへ入れた。

承知したことを、しめたのである。

にっこりした赤大黒の市兵衛が、

「急がなくてもいいですよ。ま、お前さんのことだ、安心をしています。それじゃあ梅安さん、たのみましたよ」

と、炬燵から腰を浮かせた。

二

人間の「殺し」が、金で取引きをされる場合、依頼人は二人いることになる。
すなわち、

「何処のだれを殺してもらいたい」

と、赤大黒の市兵衛や羽沢の嘉兵衛などの顔役へたのむものが一つ。
この依頼人を、暗黒街の用語で「起り」という。

いま一つは、依頼を受けた顔役が、しかるべき「殺し屋」をえらび、これにたのむわけで、この第二の依頼人のことを、どういうわけか「蔓」とよんでいる。

「蔓」は、「起り」から、或程度、

(どういう事情で、その相手を殺さねばならないのか……)
を、きいている。

なんととっても、自分が表にあらわれず、別の殺し屋にたのんで人命をうばうのであるから、自分の身に火がつくようなことになってはたまらない。

(これならいける)

と、見きわめがついたとき、はじめて、

「蔓」は殺しを請負うのだ。そして、自分の手もちの殺し屋に実行させる。この場合、「蔓」か

ら見た殺し屋を、

〔仕掛人〕

または、

〔仕掛屋〕

と、よぶのである。

仕掛人は、あくまでも金ずくで殺人をおこなうのだから、くわしい事情を知らなくともよい。いや知るべきでないのが常法であって、この場合はどこまでも〔蔓〕を信頼しなくてはならぬ。そして〔蔓〕は、〔起り〕がよこした大金の半分をふところへ入れ、残る半分为仕掛人へ報酬ほうしゅうとしてわたすことになっている。

將軍ひざもとの大都会である江戸市中で、闇から闇へほうむられる殺人は、かなりの数にのぼる。町奉行所や盗賊改方などの警吏の眼もとどかぬ場所で、こうした殺人がおこなわれる。その大半は、藤枝梅安のような仕掛人のやったことといってよい。

熟練の仕掛人のしたことは、後に影も形も残さぬ。犯罪の捜査そうさに科学のちからがおよばなかった二百何十年も前のことなのである。

（ところで……）

と、梅安はその夜、床へ入ってから考えるともなしに考えた。

（万七の、前の女房を殺しにかかった起りは、どこのどいつだろう？ ……そして、今度、後ぞえの女房を殺そうとしているやつは？）